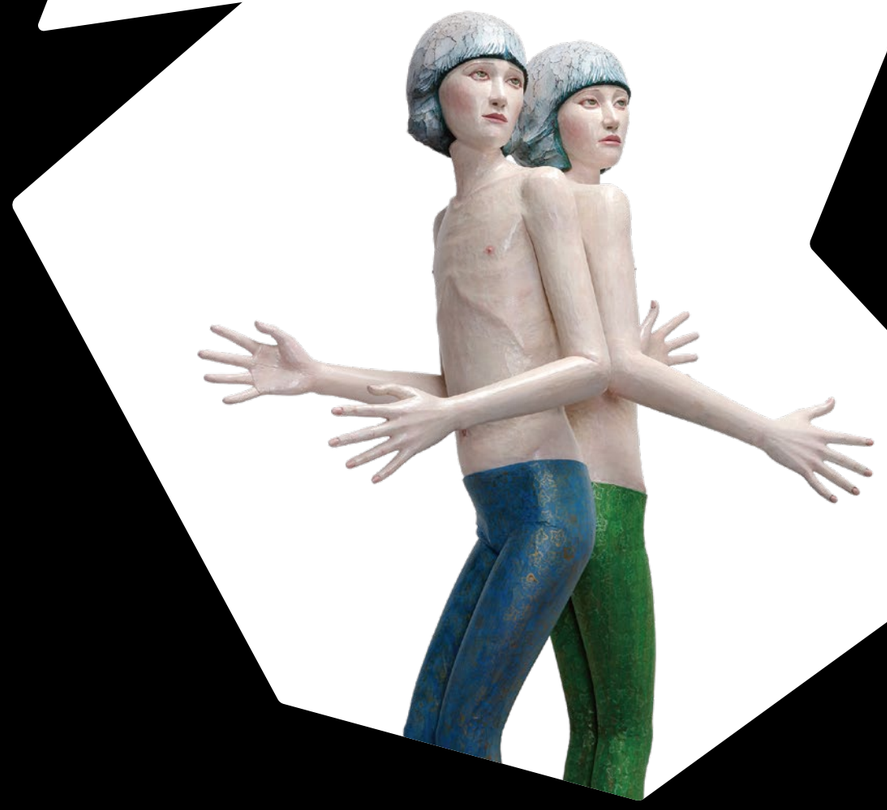
KAAT EXHIBITION
2026

三沢厚彦　棚田康司

彫刻される劇場





ATSUHIKO MISAWA　KOJI TANADA

KAAT
KANAGAWA ARTS THEATRE

KAAT EXHIBITION 2026

三沢厚彦　棚田康司

彫刻される劇場



2026　5/17SUN. - 6/14SUN.

KAAT 神奈川芸術劇場〈中スタジオ・アトリウム〉

謝辞

本展覧会の開催にあたり、ご支援、ご協力を賜りました皆様方に
心より感謝の意を表し、篤く御礼申し上げます。（敬称略／順不同）

西村建治
久保圭史
三瀦末雄
日下恵理子
野中圭一
波多野 晃
浅田政志
中野仁詞
百合本安彦
田中早苗
森 啓輔
松岡まり江
田中啓介
渡辺真太郎
増田朱里
山本精一
宮坂遼太郎
山口健二
山口慎吾
長門佐季
諸星正美
平井義人

西村画廊
MIZUMA ART GALLERY
アクセンチュア芸術部
株式会社サンエムカラー
株式会社バルコ
株式会社トータルアートサービスHIGUCHI
山口製材株式会社

凡例

本書は2026年5月17日(日)から6月14日(日)の間、KAAT神奈川芸術劇場〈中スタジオ・アトリウム〉で開催した展覧会「KAAT EXHIBITION 2026　三沢厚彦・棚田康司『彫刻される劇場』」のアーカイブブックである。

本書に掲載する作品図版は、すべて展覧会会期中に撮影された展示会場の写真を使用している。

pp.7-9、pp.11-13に掲載した文章は、本展に合わせ作られた作家による詩であり、展覧会場で朗読音声を再生した。

作家略歴、作品リストは作家から提出されたものを編集した。

作品写真及びインスタレーションビューの撮影は木奥惠三が行った。

ごあいさつ

　彫刻と劇場。一見すると相反するような組み合わせです。
彫刻は動きません。動かぬことで語ります。彫刻の周りの時間が動きます。また鑑賞者の思考が巡り、肉体が自分に合ったアングルを探しながら回遊するのが彫刻です。
劇場もまた動きません。しかしその内側は動き続けます。演劇やダンス、ミュージカルが創作され、上演され、観客の心が揺さぶられます。彫刻は周囲が動き、劇場は内側が動くのですね。
　劇場の中に彫刻を入れると、どうなるでしょう。彫刻の周囲と劇場の内側、動と動とが出会って、大きなうねりが巻き起こりそうです。鑑賞者だけでなく、さらにパフォーマンスも加わると、新たな波形が生まれるのではないでしょうか。

　彫刻とは如何なる芸術なのでしょう。神々、故人、偉人、動物、あるいは想像上の人物・怪物などが三次元で質量を持って彫り出されます。そこに私たちとは別の「存在」が現出します。特に生木から彫り出された木彫は、強い実在感を伴います。「存在」との対話がそこに生まれるのではないでしょうか。
　三沢さんの彫り出した等身大の動物たちは圧巻です。本展でも展示されるキメラもまた巨大ですが、どこか愛嬌があります。キメラはさまざまの動物が共存している生き物です。そこに調和があるのでしょうか。私たちはこの動かぬキメラの「存在」を前に何を思い、どう対話するのでしょうか。
　棚田さんの作品の繊細さは触れれば壊れてしまいそうなほどです。人間の姿をしていながら、そこに霊性が宿っているようです。静謐な気配を纏った木彫作品の、その遠くを見つめる眼差しや指先に、目を奪われずにはおれません。

　動くものをいっぱいに詰めた劇場という空間に、動かずとも雄弁なお二人の作品が現れた時、みなさまの身体や心がどう響き合うのでしょう。
　人はなぜ彫刻を見るのか。そして劇場という場所は如何なる場所なのか。まさしく『彫刻される劇場』というタイトルが迫ってきます。
全く異なるジャンルの表現がアトリウムと中スタジオで出会います。どんな物語が生まれるのでしょう。
　本日はご来場ありがとうございます。どうぞごゆっくりと、お楽しみくださいませ。

KAAT神奈川芸術劇場 芸術監督　長塚圭史













三沢厚彦



ATSUHIKO MISAWA



キメラ劇場

始まり。
この動物を見てどう感じますか。
ライオンのような顔を持ち、額には角があります。翼を持っており、尻尾に見えるところには蛇がいます。この生物は何を意味しているのでしょうか。動物の種類で見ると哺乳類と鳥類、爬虫類が一つの身体に共生してるのです。共生とはどういうことでしょうか。それに似た状態や存在してるものを思い浮かべてください。
例えば、人は哺乳類です、ライオンもそうですが、同じ哺乳類でも言葉を交わすことは出来るでしょうか。それは難しいでしょう。それが鳥類や爬虫類ではなおさらです。何を考えてるかもわからないし、安易にコミュニケーションもとれないでしょう。でも、一つの身体を持って生存してるとしたら何かに当てはめる事は出来ないでしょうか。

それでは。

全体像としてビート詩と身体性はリズミカル。
血流は浸透しリフレインする。
解放と負荷の関係性、競い同調し共存と個別化。
理論と感情、見えるもの見えないもの。

欲するもの。独自性。不可解さ。自己。脳。感情。感覚。

繋がりの在りかは分断とリテラシー。

非表現と齟齬、自己顕示欲。



共生。

協働。

共存。

分離。

宇宙。

そして。
夜はまだ　完全に落ちきらず
世界の輪郭を　曖昧に残している



そのあいだを
雲のようなキメラが歩いていく



獣の脚で大地を踏み
鳥の羽で空をくすぐり
鋭い指の指先で閉じた窓のカーテンをそっと押す

目を閉じた誰かの頭の中では
空想が　静かな工房になっていて
不安と期待を　同じ机に座らせ
言葉にならない欠片たちを
一つずつ　並べ替えている

キメラは　その工房の見えない助手として
夢の図面を運び
記憶の釘を打ち
忘れたいことと　忘れたくないことを
ほどよい距離に　配置し直す

夜の深みが　少しずつ増していくたび
分離されていた灯りは
実は同じ暗さを　分け合っていることに気づく

協働とは
同じ形になることじゃなく
ばらばらのまま
ひとつの闇を　そっと支えること

そうして今夜も
空想とキメラと人の思いが
目に見えない作業台の上で
静かに手を動かしている

棚田康司



KOJI TANADA



四篇の詩

第１篇　欠けたもの

あなたが動くとき、あなたの存在は美しかった
あなたが話すとき、あなたの声は大好きだった
あなたが見るとき、あなたの視線が嬉しかった

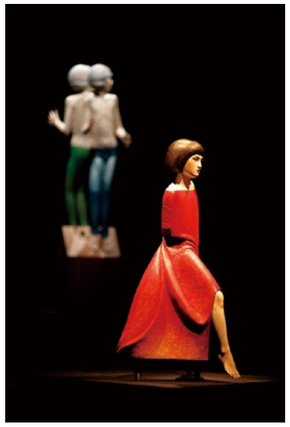
あなたがいなくなって、静かな海になった

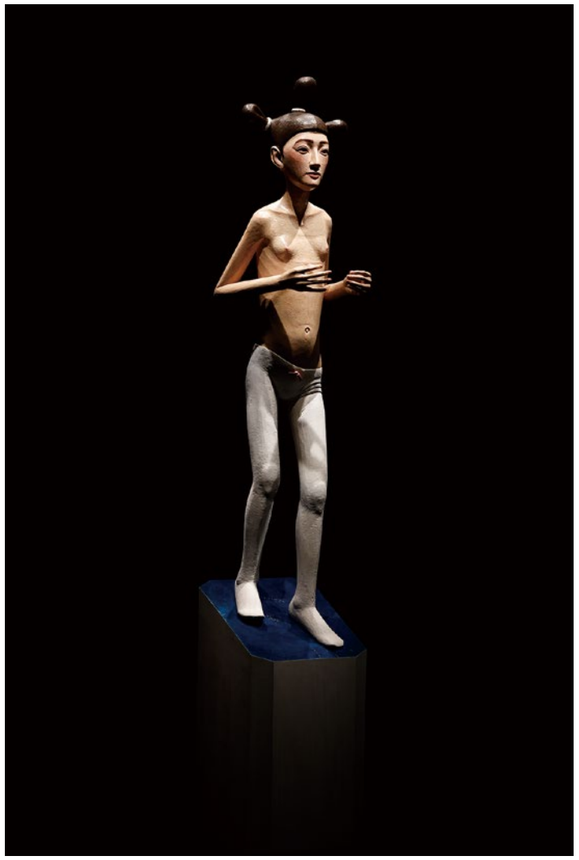
僕のこころの一部が欠けた
僕から失ったものは海の奥深くに揺れながら落ちていった

一瞬みえたもの

それは深い青に飲み込まれていった

僕はわかった
それが何であったか





第２篇　別の場所のような

この森を抜けたら何処へ行くのだろう
わたしは独りで向かっている
周りにいた大切な人は今はいない
行ったことも見たこともない世界に
ただ向かっている
この森を抜けたら

この光を抜けたら何になるのだろう
わたしは一体何になるのだろう
真っ白な世界にいくつかの白いモヤっとした玉が
光り輝く方向に向かっている
ただ向かっている
この光を抜けたら

愛を知った
いや、感じた
受け取った愛と与えた愛がわたしに降りそそぐ
幸せと感謝へ向かわせていたものは

すべてがひとつになっていく
わたしはわたしを失なって
すべてのひとつになっていく



第３篇　告白のような

あなたがいなくなるのは寂しい
いつものようにそばでとりとめのない話
僕にとって生きる糧になっていたんです

この世界に生まれた意味はある？とか
この空の青さはいつまで続くと思う？とか

年を重ねた僕は答えのない会話をするのが好きでした
あなたの言葉は明快で僕は納得は出来ます　でも、、、
僕の言葉が不正確でも聞いてくれたこと
それで勝手に、、何か、、底の方で繋がっている感じがしたのです

安心感と共有感でしょうか
それよりも深いところがあるのでしょうけれど
そこは畏敬の世界でしたので足がすくみました



第４篇　残された者

風を感じる時ってどんな時だったっけ？
走っている時、木が揺れている時、目が開けられない時
感じる時があったと思うんだ
僕にはわからなくなり始めている

私はわたしでありたいってどういうことなんだろう
自分を映し出すのは他人だけど
今の自分のままで何でもやれるってことではない
鏡がなくなると自分はどうなる？
僕にはわからなくなり始めている

残りの時間を引き受けるのは辛いもの

でも生きている
ちがう、生かされている
どこまでかわからないこの概念をどう受け入れようか

わからないままいくのも悪くないかも

僕の年輪は溶け始めている

ATRIUM















MOVIE











「三沢厚彦・棚田康司　彫刻される劇場」によせて

長門佐季（神奈川県立近代美術館長）

明滅する光が彫刻を照らし、低く響く音が空気を震わせる。海中を漂うような水音は見る者の感覚を攪乱し、スモークの噴射とともに、拡散した光によって輪郭を失った空間にひとつの時間が流れはじめる。その度合いは徐々に激しさを増し、嵐のような光と轟音のクライマックスを迎えた次の瞬間、空間全体に光が満ち、そして再び暗闇が訪れる。その間およそ42分。これは展示であると同時にひとつの出来事と言っていいかもしれない。

今年で11回目を数えるKAAT EXHIBITIONにおいて初めての彫刻展。劇場という時間芸術の器に視覚芸術である彫刻作品を持ち込むと何が起こるのか？日本を代表する彫刻家の二人――三沢厚彦と棚田康司による意欲的な展示となっている。普段、私たちが慣れ親しんでいる美術館の白い中立的なホワイト・キューブの展示室とは異なり、舞台と客席の場所を固定しない、壁も床も天井も黒い、いわゆるブラック・ボックスと呼ばれる舞台空間「中スタジオ」では、光が語り、闇が導く。会場は作品が展示される場所ではなく、作品そのものが生まれる場へと変貌している。劇場という場を得た彫刻作品は、そこで新たな生を持った存在の様相を帯びる。展示された三沢厚彦の新作《Animal 2026-01（キメラ）》（P.9）をはじめとする想像上の動物たちと、棚田康司の新作《愛を見る》（P.10）を含む、何かに抗いつつも静かに世界を受けとめる一本造りの人間像は、いずれも樟から削り出された彫像であり、それらはこの木特有の香りを放ちながら生きた気配をまとい、私たちを未知の領域へ誘う。

今回の展示での体験は、会場の扉を開ける前からすでにはじまっている。劇場建物のエントランスに設けられたアトリウムには、三沢の《Animal 2012-01（白トラ）》（P.15下）、《Animal 2007-03（白クマ）》（P14）、《Bird 2013-01（ミミズク）》（P.16 左）と棚田の《宙の像》（P.16 下）、《生える少年》（P15 上）、《霊魂に就て・七》（P16 右）が配置されている。階上にホールを有し、パブリックに開かれたアトリウムには、ホールで上演される演劇を鑑賞するために訪れる人々、あるいは昼休みのひとときを過ごす近隣に勤める人々など、日々多くの人が行き交っている。ある者は作品の前で足を止め、またある者は気にも留めずに横を通り過ぎる。しかし、いずれにしても、彫刻はその存在によって建築内部に新たな方向性を生み出し、人々の行動を無意識のうちに導いている。
彫刻に促されるように3階に進み、映像作品（P.17）を目にしたあとに会場へ足を踏み入れると、来場者はいつのまにか「見る」という行為のなかへ組み込まれ、流れている時間に巻き取られる。

暗闇のなかでスポットライトに照らされた彫刻は、床という重力の記憶を失っている。スモークの効果も手伝って、宙に浮かんで見えるその姿は、もはや物質ではなく、光と影のあわいに生まれた幻のようにも思える。その場にいる者は薄暗い展示空間のなかで他者との距離を微妙に保ちつつ、スポットライトによって順次照らされていく彫刻を目で追い、その周囲を歩く。彫刻は光によって表情を変え、視線は反転し、境界は揺らぐ。このとき、彫刻を見るとはどういうことか、という問いが残される。
白い壁と均質な光によって構成された四角い展示空間であるホワイト・キューブが美術館に定着してから100年余りしか経っていないにもかかわらず、一定の温度と湿度のもとで展示される作品に慣れた私たちは、この過度とも言える演出に戸惑いを覚える。しかしその戸惑いは、忘れていた感覚を呼び覚ましてくれる。ふと気づくと、作品の向こうに壁一面の鏡がある。鏡は空間に無限の広がりを創り出す。そこには彫刻たちとともに、自分自身の姿が映されている。「劇場」の舞台に立っていたのは誰だったのか。見ているのは自分なのか、それとも作品に見られているのか。続いて、二人の作家による詩が朗読される。言葉もまた劇場という場に不可欠な要素のひとつである。ささやくような声は光の残像と混ざり合い、空間のなかに溶けていく。言葉は意味を超え、気配となって漂う。身体が動き、光が移ろい、視線が彷徨う、その交差する点に作品が存在している。

三沢厚彦がつくり出す異種混淆の想像上の動物「キメラ」の越境する生命、棚田康司による少年少女らのか細い裸像に宿る人間と木の生命、そして、劇場が生み出す光と音の生命。それらは互いに呼応しながら、ひとつの大きな生態系のような空間を形成していた。

光や音、スモークなどによる演出に、エンターテイメント性を指摘する声もあるかもしれない。けれども、ここで体験されるのは、彫刻という「もの」ではなく出来事である。そしてそれは、生命が現れ、消え、また現れる過程そのものでもある。一方で、その出来事を支えているのは、あくまでも木という自然界の素材から生み出された彫刻である。光や音が消えたあとに残るその物質性へと意識は再び立ち返る。彫刻は床や展示台に置かれた物体でありながら、空間と時間のなかで生成し続ける現象となる。劇場というブラック・ボックスは、その現象を可視化するための装置として機能している。

ここで提示されているのは、単なる演出による彫刻の新しい見せ方ではなく、彫刻による時間の可視化である。彫刻と身体、光と闇、音と時間が交差するなかで、彫刻は固定された「もの」ではなく、変化し続ける知覚の出来事として現れている。そこで試みられていたのは、彫刻という制度や概念が拠り所としてきた境界そのものを解体し、その先にどのような知覚の可能性が開かれるのかを探ることなのではないだろうか。そこでは、彫刻は人間と世界をつなぐ存在として立ち現れていた。





ARTIST TALK 1

三沢厚彦・棚田康司・長塚圭史（KAAT 神奈川芸術劇場 芸術監督）

5月17日（日）15:00-16:00　KAAT神奈川芸術劇場＜中スタジオ＞

長塚　KAAT神奈川芸術劇場の劇場と現代美術とのコラボレーションは今回で11回目となります。劇場のブラックボックスで行う照明や音響を使った展示に作家の皆さんが大いに刺激を受け、そして劇場に来たお客様が現代美術と出会う機会にもなっています。今回は初めての彫刻展で三沢さんと棚田さんにお願いしました。アトリウムから中スタジオにつながるとても素晴らしい空間ができあがり嬉しく思っています。劇場という動く空間の中で、動かないことで語るものが現れた時に何が起きるのかという期待がありました。実際にこの劇場空間で展示して、オープンを迎えていかがですか？

棚田　感無量というのが正直なところです。今まで展示をしてきた美術的な空間ではないからどうしようかというところから、三沢さんと進めていきました。ある時、三沢さんが言った「彫刻・劇場・越境」という３つを軸に考えていったら面白いというところから、派生して広げていきました。

三沢　そうですね。劇場と美術館のオーディエンスはちょっと違います。美術館には美術を見る人の心構えがありますが、今回は劇場と彫刻を行ったり来たりしながら、ひとつの印象ではなく、多様なムーブを感じてもらえればありがたいなと思いました。それで劇場空間の素晴らしさと作品の存在感を同時に持ち帰ってもらおうと、非常に贅沢な思惑で始めました。

長塚　この空間を設定していく過程の中で、課題はありましたか？

棚田　劇場をどう捉えるかでしょうか。三沢さんと僕との間でアトリウムは地上界で、エスレーターで3階に上がってくる行動を通じて別世界に持っていけないかという考えがポンっと生まれた時に、なんかいけるなと感じました。

三沢　アトリウム空間はフリースペースで、近隣の方がお昼を食べていたり、パソコンで仕事したりする非常に素晴らしい空間です。ここに彫刻をどう展示するかを考えました。

棚田　ＮＨＫのビジョンもあり、非常にノイジーな空間でもあることを、どう攻略するか。

三沢　まずアトリウムを構成していきました。棚田さんの２点の大きい作品は間合いを取る展示と壁を背にする展示をして、彫刻が見やすい空間ができました。僕は雑踏の中に彫刻がにょきっとする感覚が面白いなと思って、テーブルの間や階段の上、言わば彫刻を置くにはあまりふさわしくない場所にしました。日常的でノイジーな空間と、スタジオの隔離された非日常の空間の差が劇場らしいなと思い、展開を考えました。

長塚　お話を聞いてアトリウムの空間設計に合点がいきました。シンボリックな棚田さんの作品とどこからか現れたような三沢さんの作品。アトリウムからの動線にふさわしい位置関係と、空間に入った人を刺激する場所にまさしくヌッと現れる。棚田さんの作品とKAATというロゴのオブジェを前にして、僕は初めてアトリウムに明確な正面性が生まれたのを発見しました。この正面という感覚をここまで強く得られたことはなく、それが立ち上がったことがとてもドラマチックでした。



その後に、中スタジオでは何が起きるんだろうと思って入ると、ほぼ真っ暗だったんで、衝撃でした。そして40分の時間。



彫刻が持つ鑑賞者との間にある時間というものがありますが、さらに照明・音響と共に刻々と変化していく40分の時間が生まれたんです。演劇は時間芸術だから、そのことに向き合ってくれたんだなという印象を受けました。お二人は、僕が下北沢の全部で60席ほどの小劇場でやったお芝居を一番前の席で見てくださったこともありましたね。演劇のやり方や面白さを研究してくださっているようでありがたかったです。この彫刻たちは彫刻特有の時間を強く抱きながら、ある種この空間における時間芸術の登場人物になり得たというような感覚があり、いいチャレンジをしてくださったなと思いました。

三沢　中スタジオと同じくらいの美術館の展示室に展示したとして、40分間見てくれる人はあまりいないんですよね。演劇の面白さは、時間軸と演出によって連動させながら、ある時間を留まらすことで、それをやりたいなと思いました。劇場の技術スタッフと話し合って音と照明のパターンをつくりました。美術館にはこんな機材がないし、プログラミングして1つの尺でループをつくるという展示もあまり見たことがないのですが、テクニシャンの方が優秀で簡単にやってくれるんです。演じる人がメインなんだけど、やっぱりそういうテクニシャンの人があって劇場ができているのをすごく感じました。

長塚　劇場というのは光と影の空間なので、暗闇の中にどう光があたるかということは大前提です。普段演劇という動きのある作品をつくっているスタッフも美術展をデザインするのは刺激的で、意気込んでやっているところもあると思います。

三沢　演出の中でも彫刻が凛とした存在で、鑑賞に堪えうるものであれば、演劇性と彫刻の関係性をうまくブレンドできたのかな。

棚田　暗闇の中でひとつひとつ照明がついている作品に向かって人がわーっと動いていっていたのが、非常に面白かった。作品を見ている間にいろんな影や光、かたちが出てくることで、何かストーリーが生まれてきて、見ている側の皆さんが演者に変わっていくと思いました。劇場性を取り込めたのではないかという確信を持ちました。

長塚　明かりがバッてあたった作品を導かれるように見に行って、次は明かりが遠いから、よし遠くから見ることにしようとか、そういうことが起きるのが面白かったですよね。最後に全灯する時、空間全体の中に作品が存在しているという体験が劇的に残る。まんまといい感じの鑑賞者になっていました。

僕は彫刻に関して素人なので、「さあ彫るぞ」という原動力はどう生まれて、どういう過程を踏むのかがとても気になっています。

棚田　自分が一番興奮するのはやはり丸太をボーンと立てた時です。まずその木の持つ正面を決めます。この展示作品でいうと、丸太をズバーっと縦に半分切って最初につくったのが『宙の像』っていうアトリウ

ムの像で、残りの半分の木でつくったのがこの『ヌーダ ヴェリタス(2020年 全裸の真理)』です。2つの像の後ろをくっつけると、元々の1本の木のかたちになります。そういった物語を自分の中でつくり上げた時にすごくゾワッとするんですよね。丸太を立たせた時に、絶対にこの中にヌーダ ヴェリタスであったり、宙の像が入ってるはずだという確信から始めていくんですけど、とにかくそこに早くたどり着きたいと、どんどん空間を削る作業をします。

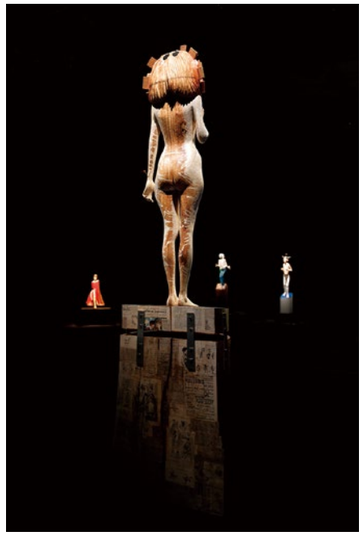
長塚　いやあ、とっても面白いです。三沢さんはどうですか？

三沢　簡単に言うと好きなんでしょうね。彫るとか物質に触ることとか、つくることが。だから挑むというスタンスとも違う。制作に関わる時間軸はすごく大事だなと思います。つくるのに時間がかかる中で、大変なことも楽しいこともあり、一言で言えないような要素があります。まずは、モチーフ設定があり、木を選ぶことから、デッサンを描く、チェーンソーで切る、ノミを使って彫る、そして着彩する。彫刻はそういう多様で多彩なメディアだなと思います。様々な気づきがあり、そして物質がある。そこがやっぱり面白いですよね。

動物の彫刻をつくりながら思ったんですが、例えば「いぬ」。「いぬ」っていかにも「いぬ」らしくないですか。あのかたちで「いぬ」ってナイスなネーミングだと思いませんか。「ねこ」もあのかたちで「ねこ」ってすごくよくできてる。人間が名前をつけることによって自分の中でリンクをつけているなって思います。あの姿のものを「ねこ」って呼んで、「ねこ」本人は「ねこ」って呼ばれてることも知らない。人間がこのリアリティをつくっている構造が面白く、それとつくることが連動する瞬間があり、彫刻をつくり続けられる自分の原動になっている。リアルとかリアリティとか人間が認識できるものが現れた時に、やっとできたかなって思います。

長塚　認識の作業ですね。作品はどの時点で、いつ仕上がるんですか。

棚田　僕の中ではあるラインがあって、そこまでは絶対行くって決めているんですよ。それは過去に自分の重ねてきたクオリティっていうんでしょうか。そこに行かなければ、もうずっとモヤモヤしながら、ちょっとずつ手を入れたりしながら近づけていく感覚でしょうか。



三沢　僕の場合は、このキメラが、もういいよって言う感じです。ある程度できたら、「もうちょっとこうして」って言われる感じがあります。不思議なんですけど、どの作品も、もういいよって言う。

棚田　三沢さんのその言葉でちょっと近い感じっていうのは、つくっている像自体が僕を見てる感覚になってくるといい状況だな、だいたい完成近いなって感じます。そういう感覚があったりします。

三沢　自分でつくっていないのかもしれないですね。

ARTIST TALK 2

三沢厚彦・棚田康司・長門佐季（神奈川県立近代美術館長）

5月23日（土）15:00-16:00　KAAT神奈川芸術劇場＜中スタジオ＞

長門　最初に感想をお話しすると、建物に入ると真っ先にアトリウムの作品が目に入り、展示がここからスタートしているという印象を受けました。作品がこの会場に向かって導いてくれるというか、階段を昇る行為自体が高揚感を感じさせます。その後、展示室に入ったら、いきなり真っ暗でした。アトリウムの外に開かれた明るい空間と、中スタジオの閉じた暗い空間の変化も非常に楽しく拝見しました。

今回の展覧会は劇場で開催されていますが、美術館と劇場の違いについては、どのようにお考えになりましたか？

三沢　美術館と劇場の制度と性質はやはり違いがあると思います。共通性もありますが、一つの時間軸を区切る場所と、自由な時間軸で見る場所というのが大きな違いだと考えています。なので、中スタジオの中では劇場を意識し、40分の時間軸をつくりました。

棚田　ホワイト・キューブは彫刻が持つ永遠性や、静止している彫刻の時間性のような「彫刻力」を発揮する点で本当にいい空間だと思います。ブラック・ボックスは光を当てていくことで、彫刻の見え方が違ってきますね。「刹那の彫刻」の時間というのでしょうか。光が彫刻の片方から当たっていき、そこで生まれた陰影によって、鑑賞者はいろいろなストーリーを思い描くのではないでしょうか。その瞬間に、鑑賞者が演者に変わるような、40分になればいいなと思いました。この時間は人生のようなものかなとも感じます。音と光が嵐のような時もあれば、スポットライトを浴びている時もあり、光から外れ闇の中にいるように感じる時もある。彫刻を通して人生を味わってもらえたらと思っています。

長門　鏡もあります。ふと気がつくと鏡に映っていて、彫刻の中に自分がいるみたいな感覚があります。普段の劇場では演者が動き、観客は座っていますが、この空間は彫刻の方が観ている側になって、観ている方が演者になっているみたいな感じがします。そう考えると、展覧会自体がお二人の作品のように感じられます。40分の中でストーリーが演出されていて、私は三沢厚彦・棚田康司演出・脚本と入れていただきたい展覧会だなと思いました。

お二人の作品に共通しているのはやはり「境界」ということでしょうか。三沢さんはキメラの作品がそれにあたるのでしょうか。

三沢　「キメラ」というテーマで近年制作を続けています。キメラというのはギリシャ神話に登場する生き物です。その時代は、バラバラの要素や考えをどうやって共存や共有させるかということがテーマになっていたのではないかと思います。キメラには、爬虫類や鳥類、哺乳類、人間も混じっている。DNAも言葉も違うものがひとつのボディを共有しているということが、非常に興味深く、人間が暮らしていく世界に常に付きまとうテーマだと思います。今まさにそのような意味合いが強くなっていて、いろいろな概念に組み替えられると思います。それと、劇場性のようなものが自分の中でしっくりきて、ボディは同じだけど演目が変化し、次々と違う表現が出てきて空間をかたち作る。劇場はキメラ的だと気付き、この空間はキメラだけに絞ろうと思いましたね。キメラは色々なものが混じっていますが、モチーフも一つで、





ポージングも立つ、歩く、座るだけのミニマルなものです。棚田さんの作品は、指先や足先の動き、布の感じなども見てもらえれば、そこにすごくニュアンスがあることがわかります。違う役割があり、互いに響き合う。二人展というより、お互いの作品がフォローし合ってつくり上げられた展示という気がしています。

棚田　三沢さんが「キメラを出そうかな」と言われた時に、「うわ、そうか！」と思いました。放つものが尋常ではない強い作品なので、対抗ではないのですが、どう三沢作品と空間をつくり上げられるかと考えました。僕の彫刻のもっとも理想的な在り方というのは、境界線上に存在していることです。新作の『愛をみる』は元々手を下げていたんですが、あのポーズになったのは、二人の少年を境界線上に存在させたいという思いからなんです。この境界線はただのラインではなく、幅を持った空間であればいいなとずっと考えています。三沢さんは動物、僕は人間で、境界線が出来てしまうけれど、それを何とか線ではなく、空間の幅で見せられたらと考えました。それで、あの手を挙げたポーズになったのですが、奇しくも立ちキメラと似た近しいポーズとなりました。その後、ここには絶対あの子しかないなと真ん中にいる像『結ぶ少女』も思いつき選びました。2つの手を挙げている像が立ちキメラとシンクロしていく。僕の中では本当にワクワクする挑戦でした。

三沢　初めて聞きました。場所の性質も影響していて、ここは大きな鏡があり俳優さんやダンサーさんが練習する稽古場です。大きな鏡のことを「姿見」と言いますが、ここには空間全体を映す鏡があり、それがとても面白いと感じました。ここは練習場であり、自分を確認する場所であり、人に見せる場所でもあります。このように、場所性や境界線が交じり合っている部分があると分かったから、今回は僕らが美術館ではできない、劇場でしかありえない展示にしようと気持ちを決めました。

長門　そういう意味では、照明があり、音響があり、スモークも使われていて、この施設や設備が存分に使われていると思います。なかなか美術館ではできない展示だと思いました。美術館は展示と同時に作品を保護していくことが使命になっていて、大胆なことができないのが制度的な問題だと思います。技術的にできるかというだけではなく、そこに大きな境界があるのだなと思って拝見していました。

空間があれば展示ができてしまいますが、「劇場」という意識はどこにあるのでしょうか。

三沢　やはり演出であり、一つの時間軸、つまりプログラムをつくるということにあると思います。その時間軸を体験してもらうことが、美術館よりも少しエンターテインメント的であると思います。僕らも今まで入り込んでいなかった領域の表現にも挑戦しています。音をつくり、二人で詩を書きました。アトリウムで上映する映像もつくりました。てんこ盛りになっています。





長門　詩をつけようというアイデアはどこから出てきたのでしょうか。

三沢　「詩とかやったら面白いよね」と僕がボソッと言ったのが始まりかなと思います。やはり演劇性というのは、言語表現であり、その中で一つ凝縮された表現として詩がいいなと思いました。

棚田　僕は女性の囁くような声で詩が流れるのがいいと思いました。KAATで働いている身近な方に読んでもらうのです。想像以上に素晴らしい朗読になりました。三沢さんと僕の詩を一緒に流してみたら、同じくらいの分量でほぼ時間がずれなかったのも不思議でしたね。

長門　作品の配置についてもお聞きしてよろしいですか。

三沢　スタジオ内は、壁際に沿って円形に置くしか配置できなくて、中心は見に来た皆さんの場所にしようと思いました。皆さんが作品を見ていますが、ふとすると作品が皆さんのことを見ている気持ちになる。彫刻の存在と入れ替わってしまうような感覚を味わってもらいたいなと思いました。今回は、「彫刻・劇場」ということをテーマにしているので、皆さんもオーディエンスとしてとても大きな要素です。あそこに座っている小さなキメラは、皆さんを見ている傍観者的な存在として置いてみました。ウサギは、全灯で薄い光の中にぼ〜っといます。不思議の国のアリスに出てくる「白ウサギ」は別の世界に誘う役割ですが、このウサギは白黒のぶちで、現実に戻す役割として入れ込んでいます。

棚田　展示に関して、僕はすごく勉強になりました。僕たちの彫刻は「目」をもっていますので、どの方向を見ているのか、何を見ているのかをお互いに意識しながら、展示を決めていきました。スモークも出ます。木彫とスモークはご法度なのですが、それも全部やってみようという話になりました。レコードのアルバムをつくっていくような感覚で、自分の作品がひとつの曲だとしたら、三沢さんが名曲をドーンと出してきて、1枚のアルバムにまとめるのにどうしようかと考えていきました。それが、僕の思う演劇性のようなものに落とし込める作業でした。

長門　もう一つ、要素として「匂い」がありますね。

三沢　匂いを感じられた方いますか？これは樟の匂いで、棚田さんも僕もすべて樟なんです。樟は日本で仏像がつくられ始めた飛鳥時代から使われてきました。つまり、僕らの作品づくりのスタンスは飛鳥時代から全く変わっていない原始的な表現ということです。

展覧会で可視化できない領域はすごく意識します。雰囲気や気配、匂いといったものは人間の感覚に残ったり、訴えかけるものが多いと感じます。今回は、そういうものも演出を通して強く意識しました。

棚田　匂いは記憶と直結します。同じような樟の匂いを嗅いだ時に、KAATでこんな展示をやっていたなと思い出していただけたら嬉しいです。

Related events

展覧会のコンセプトに呼応した関連企画を展開。美術館と劇場の分野を越境してたたずむ彫刻たちと、
枠にとらわれない刺激的なアーティストたちが生み出す、今回限りの特別パフォーマンス。



パフォーマンス

東京QQQ「彫刻されるわたし。」

ポールダンサー、ドラァグクイーン、車椅子ダンサー、バーレスクパフォーマーなど、ジャンルを超えた個性豊かな表現者が集う東京QQQがフルメンバーでアトリウムに登場！唯一無二の現代アートパフォーマンスを開催。

日時：5月31日（日）13:00／16:00
会場：KAAT神奈川芸術劇場＜アトリウム＞
出演：東京QQQ（アオイヤマダ／かんばらけんた／Kily shakley／KUMI／高村月／ちびもえこ／MONDO／山田ホアニータ）



パフォーマンス

五十嵐ゆうやと仲間たち「彫刻される心・褌」

長すぎるふんどしを使ったパフォーマンスで話題を集める五十嵐ゆうやがアトリウムで行う「越境」とは？！ユーモラスでキレのある動きが魅力の五十嵐が仲間を引き連れ、静かに立ちつくす彫刻たちとコラボレーション！

日時：6月6日（土）・7日（日）各日12:30
会場：KAAT神奈川芸術劇場＜アトリウム＞
構成／演出：五十嵐ゆうや
振付／出演：五十嵐ゆうや、池上たっくん、望月寛斗



ライブ

山本精一・宮坂遼太郎「彫刻される音」

ミュージシャン・山本精一とパーカッショニスト・宮坂遼太郎による即興ライブ。彫刻が並ぶ展覧会会場の中で、13日はExperimental Night、14日はAmbient Night、と二夜表情の異なるライブパフォーマンスを披露。ライブの後には彫刻家・三沢厚彦とのトークも開催！

日時：6月13日（土）19:00開演（18:40開場） Experimental Night
　　6月14日（日）19:00開演（18:40開場） Ambient Night
会場：KAAT神奈川芸術劇場＜中スタジオ＞
出演：山本精一・宮坂遼太郎（トーク出演 三沢厚彦）

関連企画撮影：木村雅章

KAAT EXHIBITION 2026
三沢厚彦・棚田康司
彫刻される劇場

作品リスト

＜中スタジオ＞

三沢厚彦

P.6　Animal 2023-01
千葉市美術館所蔵
2023
樟、油彩
324.5 × 165.5 × 266cm

P.8 上　Animal 2020-03
2020
樟、油彩
208 × 112 × 346cm

P.8 下　Animal 2022-03
2022
樟、油彩
77 × 24 × 40.5cm

P.9　Animal 2026-01
2026
樟、油彩
95 × 69 × 125cm

棚田康司

P.10　愛をみる
2026
樟の一木造りに彩色
202.5 × 93 × 53cm

P.11　地上の少女
個人蔵
2025
樟材に彩色、家具脚
110 × 60 × 53cm

P.12　結ぶ少女
個人蔵
2009
樟材の一木造りに彩色、レース糸
200 × 35.5 × 41cm

P.13　2020 年 全裸の真理
2021
樟材に彩色、オイル、金箔、アルミ板、
ステンレススクリュー、新聞紙
312 × 103 × 65cm

音楽
三沢厚彦　J.K.B 11,2,2026　2026
　　Space K　2026
　　Theater No.3　2026
　　Storm S　2026

編集　星野大輔、櫻内憧海／ KAAT

詩
三沢厚彦　キメラ劇場　2026
棚田康司　四篇の詩　2026

朗読　足立晴美、佐藤 梓／ KAAT
録音編集　星野大輔、櫻内憧海／ KAAT

＜アトリウム 3F ＞

P.17 上　三沢厚彦
Pulse moment I　2023　10:38
Pulse moment II　2023　09:08

P.17 中　棚田康司
無題　2026　05:07
無題 2　2026　05:00

＜アトリウム 1F / 2F ＞

三沢厚彦

P.14　Animal 2007-03
2007
樟、油彩
211 × 81 × 108

P.15 下　Animal 2012-01
2012
樟、油彩
131 × 76 × 292cm

P.16 左　Bird 2013-01
2013
樟、油彩
21 × 8.5 × 8cm

棚田康司

P.15 上　生える少年
2011
樟材の一木造りに彩色
194 × 133 × 30cm

P.16 右　霊魂に就て・七
2025
樟に彩色
58 × 34.5 × 13cm

P.16 下　宙の像
2020
樟材の一木造りに彩色
308 × 95.5 × 39cm



右：三沢厚彦　左：棚田康司　　撮影：浅田政志

三沢 厚彦 / MISAWA Atsuhiko
1961年京都府に生まれる。1989年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻修了。2000年動物の姿を等身大で彫像した木彫作品「ANIMALS」シリーズを制作開始。同年より西村画廊（東京）で個展開催。2007-08年平塚市美術館（神奈川）など全国5館で巡回展。以後、各地の美術館で展覧会を多数開催。近年の個展に、2021年北九州市立美術館（福岡）、2022年新潟県立近代美術館、2023年千葉市美術館（千葉）、石神の丘美術館（岩手）、2024年新居浜市美術館（愛媛）、2025年文化フォーラム春日井（愛知）など。主な受賞歴に、2001年第20回平櫛田中賞、2019年第41回中原悌二郎賞など。主な作品集に『ANIMALS NO.3』、『ANIMALS/Multi-dimensions』（共に求龍堂）、『動物の絵』（青幻舎）など。パブリック・コレクション多数。神奈川県在住。

棚田 康司 / TANADA Koji
1968年兵庫県明石市生まれ。1993年東京造形大学造形学部美術学科II類（彫刻）卒業。1995年東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。2001年文化庁芸術家在外研修員として7カ月ベルリンに滞在。2016年インドネシア・バンドゥンに2カ月、シンガポールに1カ月滞在制作。一貫して木彫に取り組み、日本古来の木彫技法である「一木造り」によって人間像を彫りつづけている。その作品は、大人と子ども、人間と自然、個人と社会の「あいだ」といった境界線に存在し、無限の広がりを感じさせる。
主な個展に「たちのぼる。」（練馬区立美術館／伊丹市立美術館2012-13年）、「OJUN×棚田康司 閾（せめぐ）」（伊丹市立美術館、2017年）、「線上に幅を 空間に愛を」（井原市立平櫛田中美術館、2023年）など。2022年、第30回平櫛田中賞受賞。神奈川県在住。

KAAT EXHIBITION 2026
三沢厚彦・棚田康司
彫刻される劇場

2026年5月17日（日）〜6月14日（日）
KAAT 神奈川芸術劇場 ＜中スタジオ・アトリウム＞

主催・企画制作　KAAT 神奈川芸術劇場
協賛　アクセンチュア芸術部
協力　株式会社サンエムカラー
　　千葉市美術館
　　西村画廊
　　株式会社パルコ
　　MIZUMA ART GALLERY

［展覧会］
作家　三沢厚彦
　　棚田康司

コーディネーター　松井真理子
運営マネージャー　八尋由美子
運営アシスタント　武田 花、森 令子
関連企画制作　佐藤 梓

プロダクションマネージャー　平井 徹
機構　鈴木寿彦
照明　大島 真
音響　星野大輔、櫻内憧海
展示運搬　樋口太助／トータルアートサービス HIGUCHI
アトリウム映像　栗山聡之／マグナックス

朗読　足立晴美、佐藤 梓／ KAAT
映像編集　田中啓介／ Studio OLGA

アートディレクション＆デザイン　清水龍之介
ウェブサイト制作　SETENV
編集　住 麻紀／ HAHIRE
記録撮影　木奥惠三
記録映像　西野正将
関連企画撮影　木村雅章

広報　佐藤博樹
チーフプロデューサー　本郷麻衣
事業調整部長　伊藤文一
支配人　堀内真人

芸術監督　長塚圭史

［関連企画］
出演　東京 QQQ、五十嵐ゆうや、池上たっくん、望月寛斗、
　　山本精一、宮坂遼太郎
トーク出演　三沢厚彦、棚田康司、長塚圭史、長門佐季

［アーカイブブック］
アートディレクション＆デザイン　清水龍之介
写真　木奥惠三
執筆　長門佐季
編集　住 麻紀、松井真理子／ HAHIRE
印刷　株式会社サンエムカラー
発行　KAAT 神奈川芸術劇場（指定管理者：公益財団法人 神奈川芸術文化財団）

KAAT 神奈川芸術劇場

【芸術監督】
長塚圭史

【支配人】
堀内真人

【副支配人】
横山 歩

【事業調整部長】
伊藤文一

【制作】
本郷麻衣
鈴木 収
牛山直美
小倉千明
佐藤 梓
笠田優奈
林 有布子
阿部真依
松井真理子
——
笛木園子

【制作アシスタント】
廣瀬淳子
峯 絹代
早川美樹

【広報営業】
大沢 清
佐藤博樹
飯田周一
大石瑞季
安田真知子
足立晴美
伊藤宗之
片山杏香
金子久美子
小林良子
濱田美香

【企画調整】
河崎巴見
林 美佐
村永一恭
谷 真司
上原広美
佐藤道元
横山菜々
山本萌歌
菅井真理子
八尋由美子

【プロダクションオフィス】
大石真一郎
平井 徹
徳久礼子
本庄陸人
鷲山晴美

【舞台機構】
坂口 剛
鈴木寿彦
鈴木勇生
宮坂季樹
井関周平
山添 平
新保大河

【照 明】
森川敬子
大島 真
佐藤綾香
山下綾花
北上舞奈
太田沙友里
勝部遙河

【音 響】
星野大輔
櫻内憧海
西田祐子
江口佳那
水野 妙
杉江陽奈
小川紋伽

【総支配人】
眞野 純

© 公益財団法人 神奈川芸術文化財団　無断複写・転載を禁じます。

